

135
7
43

安心ほこりたしき

附 施行歌。道歌三十首

(一) 安んずる心

白隱和尚畧傳

師名は惠鶴號は白隱

原の人なり幼なき時より僧の

地獄の苦患を説を聞て大に恐怖し是より出離を求むる

心あり遂に邑の松陰寺に入て出家す而してより東西に

行脚してしきりに普徳の門をうかぶ後信州の正受老

人に参して身心を打失す悟後の修を修して大に宗風を

振ひ門下に十餘員の智識を得たり實に近世の活僧なり

明和五年十一月十一日寂す壽八十四 勅して神機獨妙

禪師と諡す

安心ほこりたき

白隱禪師述

歸命頂禮御釋迦如來。やれく皆さん聞てもくんねへ。わらが親父を。何處のれ人も。悉多太子か。知らぬが佛か。若い時から商ひ好にて親の讓の家も位もすほんど打すて。十九の年から山へはいりて阿羅邏迦蘭の二人の仙人。師匠と頼みて。菜摘水汲。薪を凝てな。奉公勤めて。元手をこしらへ。十二年目に初めて店出し。華嚴と名けし。結構な代呂物賣てみたれど。文珠普賢の二人は買たが。餘り高くて。其餘のれ客は。盲か聾か。見向もせぬから。是ではいかぬと。分別仕替て阿舎と名けし。安物賣かけ。口上ひねれば。店先せはしく。れ客が來やら得意が付やら。そこで追々代呂物仕入て。商ひ手廣に。方等般若に。法華や涅槃と。れ

1420

No. 1420 / 20

安心ほこりたへき

白隠禪師



歸命頂禮御釋迦如來。やれく皆さん聞てもくんねへ。わらが親父を。
 何處のわ人も。悉多太子か。知らぬが佛か。若い時から商ひ好にて親の
 讓の家も位も。すほんど打すて。十九の年から山へはいりて阿羅邏迦
 蘭の二人の仙人。師匠と頼みて。菜摘水汲。薪を凝てな。奉公勤めて。元
 手をこしらへ。十二年目に。初めて店出し。華嚴と名けし。結構な代呂物
 賣てみたれど。文珠普賢の二人は買たが。餘り高くて。其餘のわ客は。
 盲か聾か。見向もせぬから。是ではいかぬと。分別仕替て。阿舎と名けし
 安物賣かけ。口上ひねれば。店先せはしく。わ客が來やら。得意が付やら
 そこで追々代呂物仕入て。商ひ手廣に。方等般若に。法華や涅槃と。わ

客の機を見て代物あてがふ。商ひ上手に、須達長者と、呼るゝ金持とゑらふ。戀こみ、祇園精舎と。名高ひ屋敷を、ね釋迦にあてがひ。大店開けば、早速其名が諸方へひろがり。どてつもなひ程。商ひ繁昌、天上天下に一人の親玉譽てもくんねへ。その時賣出す。妙法の精薬法華の一法盛んに流行て、ね若い嬢さん、龍女と申が、之を買うけ。どつくり吞込成佛なされた。しかし此人、文珠の化物、智慧があるから、さどりも開けた我等が嬢とは、とゑらい違ひた。又々其時韋提希夫人と、申せし女中は、智慧も元手も、どつばりなひのに、阿闍世と申して、不幸な御太子、提婆達多と心を合せて、親もね釋迦も、仕舞てのけると、頻婆沙羅王牢屋へをし込、憂目に合せた。そこで韋提は、不樂閻浮と、此世を厭ふて、わたしのやうなる。五障三從重き病ひの直る薬りが、あるなら下され。ね

願ひまうすと、ね釋迦に向つて送るかにたのめば、ね釋迦は合點。五三三の桐だよ。此様なね客が大かたあろふと、己前父君、淨飯大王其外一門、勧め忝せて、極樂淨土へ送り届けし、秘密の妙方、甘露で煉あげ、平等大悲の、大事の奥の手、大切ものゆへ、四十餘年のながの月日を、ね藏へ納めて、たしなみ置たが、さらば是から、賣かけましやうと、法華の商ひしはらく休みて、阿難目連、二人の手代を、左をにめし連れ、王宮としてな、出現なされて、韋提希夫人に、彌陀の本願、他力の念佛、五劫兆載、思惟の薬味は、諸佛菩薩や、六度の行まで、一つに合せた。六字の丸薬、一向專念男も女も、産前産後も、とし合ごさらぬ、智慧も元手も、どつばりいらない。口にまかせて唱ふるばかりだ。どうで其方は、心想事成才得大業、思が虚弱で、元手の足らなひ、ね臍も見ぬいた。三毒重病まして

難治の極重悪病。是れらの症には。是より外には用ふる薬は。決してな
 ひぞと。れ勸めなされた。韋提は元より。五百の侍女まで。無始よりこの
 かつ積りし罪業。煩惱疑惑の。積氣の持病に三世の諸醫師も匙を投た
 る。大病なりしが。其場で現益。阿耨多羅。汗が流れて。即日平愈。何
 どみなさん。六字の丸薬。不可思議妙法。梵語をそのまゝ。用ひてみな
 さい元手のいらぬが。肝心要めだ。餘り無造作で祖父母々だましの。古
 代呂物かど。ちつくり疑ひ何ぞ利口な。物はなひかど。知識に問たら。直
 指人心。見性成佛。れ釋迦が即ち。堯爾とわらへば。迦葉かにつこり笑ふ
 た受賣是が本法。一嗣相傳さどりの眼を。開いて見たれば。れ釋迦も我
 等も。是は何物。本來面目。無一物とは。こりや又どゑらい。掘出ものだ
 ど座禪を始めて。やりかけましたが。膝がぶり。ふり付ますやら。陸

りがくるやら。背中をどやされ。大きなれ目玉。爰が何でも。辛抱どころ
 と。氣張て見たれば。三年昔に隣へかしたる。黑豆三合。糠一樹。思ひ出し
 て忘念山。是も我等が。性にはあはなひ。商賣替ふと。眞言祕密を
 どの様な物だど。尋ねて見たれば。阿字本不生で。自身の脚にも。阿字が
 備はり。羅字は元より。差別と分れて五智も五大も。この胸一つで。父母
 の腹から。生れた處に。金胎兩部の。大日法身。直に佛の。位でござんすと
 聞とそのまゝ。れんあぼさやべいを。やりかけたれども。元手も持すに。
 自力の商賣して見るやうなる。ばかぼたらにて。阿字やら羅字やら。さ
 つばり知れなひ。そこで圓頓妙法蓮華の。即身成佛。さても無上の。妙
 劑なれども。丸讀解行は。我等が下根に。及びもなひ。故題目ばかりの。
 看版ぐらわじや。出る息ばかりで。功能は分らず元手がなひから丸で

は買れず。四十餘年。未眞實。何の事だ。尋ねて見たれば。六字を磨
 げた法華經八軸。故に六字は。法華の肝要。れ經の畧にて。藥于品には
 妙典八軸。吞こむ時には。西方極樂。阿彌陀の淨土へ。生れて往ぞ。説
 てあるとよ。何も勘定廻りく。遠道せうより。路銀のいらぬ。南無
 阿彌陀佛で。すぐに往のが。一ばん近みち。なんと皆さん。そうではなひ
 かへ。まんだあるぞへ。みなさんきへ。鳳ひろも。夕飯くはずに。
 二食で暮して戒行たもつは。始末勘畧。利口な算用。しかし我等は。蚤も
 虱も取らずにや置かねへ。手をば出して。盗みはせねども。心にほしく
 て錢金持たし。嫌もなければ。子種がなくなる。虚も少しは。つかねばな
 らぬし酒ものまねば。嫁入婚どり。振舞その外世間が渡れぬ。何と是で
 は五戒も持てぬ。これは尙さら。買てが少なひ。店のさびるが。世界のた

めだよ。これがはやりて。賣ひろがるなら。息子も此丘さま。むすめも
 尼さま。むら役町やく坊主あたまで。田地も作らず。酒屋もなければ。
 和尚に嫁入の媒酌もあるまひ。それでは世間。人種なくなり。人間
 世界がつぶれてしまふぞ。とても我等に自力のあきなひ。しやうと思
 へど。根氣と元手がなくて。は出來ぬしどうでも親父の教にまかせて
 元手のいらなひ。他力念佛。六字の妙藥我等が病氣に。てつきり合ま
 す。しかし元手が澤山あるなら。自力の商なひ。なされてごろうじ細い
 元手で。あきなひ仕かけて。棒でも折たら。逐地も去地も。茶の木の畑で
 れ透ひなさるぞ。むかしはなしを聞てもみなさい。十方諸佛が。釈迦
 の證人文珠普賢や。後佛の彌勒も。たしかに受とる。諸宗の祖師たち。
 智慧ともどでが。澤山あれども。六字の丸藥。れすてはなされぬ。まして

我等は智慧も根氣も元手もなひから。自力の足なへ。他力のね船に。乗より外には。分別でござらぬ。凡夫がそのまゝ。佛になるとは。石や瓦が不思議に變じて。黄金となるのだ。それが虚なら。三昧發得。なされたれ方に尋ねてごろうじ。何と皆さん。うれしいことだぞ。儒道や神道。心學などが。あきなひ敵きで。色々さまゝ。悪口いふとも。我が親父の仕來り商ひ。格段違ふた。どゑらひものだよ。根元本店。天竺横町。それから唐土日本へ見世だし。八宗九宗と。商ひ繁昌弘めた代呂物。いやだと云たらう。そばたに居られぬ。恐れねほいが。聖徳太子や。菅公。楠家の歴々さまでも。ね用ひなさるゝ。夫が中にも。織田の信長。妙法蓮華の。はたをなびかせ。軍をなされて。大方天下は。治りたれども。信心堅固の。資金がないから。やうゝ一代。明智の謀叛に。さつぱり

しまつた。申すも恐て。いはれぬけれど。權現さまはな。六字の丸藥軍の中でも。ね用ひなされて。欣求淨土の。御旗をれし立。天下をなびかせ。四海を泰平。御世萬々歳と。ねつきあそばす。何とみなさん。ござんじ。あらふが。うそではなひぞへ。是をみなさん。手本になされて。六字の丸藥。家内へすゝめて。朝夕不斷に。忘れず用ひば。仕事しながら。罪障消滅。闇夜の歩行も。ねそれはなひぞへ。四海靜かに。現當繁榮。子孫は長久。今世の祈禱も。來世の利益も。是に過たる藥はなひぞへ。虚はつかねへ。これみなね釋迦の味。憎ではござらぬ。本法のことだよ。ほういゝ。



施行歌

白隱禪師述

今生ふう貴するひとは
 今生は尽こしせぬ人は
 利口で富貴が成あふば
 利口で貧乏するを見よ
 未来は此世のたね次第
 蒔たね大小あるもへぞ
 よい種擇んで蒔たまへ
 穀物取たるためしあし
 麥稗取たるためしあし
 五升や一斗は實るぞや
 果報は倍々あるものぞ

前世に蒔をく種がある
 未来は極めて貴あるぞ
 鈍あるひとはみあ貴か
 この世は前世の種次第
 富貴に大小あることは
 此世は儲のものあれば
 種を惜みてうへざれば
 田畑に麥稗まかぞして
 麥ひえ一升ま死おけば
 しかれば少しの施し
 いはんや施し多ければ

果報も多しと計りしれ
 施しせよとす、めたり
 救ふこゝろを發すべし
 有ば有はどたぬもの
 持子が持ねば持ぬもの
 持子はあつばれ持者ぞ
 ひとを倒さむ施行せよ
 我が子に譲りて怨とある
 由づる我が子が沈み死る
 筆の非道はしたまふあ
 あまり非道あ利を取あ
 其身は三途に落入りて

了れ故お釋迦も觀音も
 さすれば乞食非人まで
 冬く富貴で持たかり
 多くの實を由づるとも
 少しも田畑由づらねど
 我が子の繁昌いのるあし
 人をたをして持たかり
 ひとの恨のかゝるもの
 ますや秤やろばんや
 つねく商ひする人も
 死んで三途に入る事ぞ
 屋敷は草木が生しげる

非道は子孫の害とある
 世間に數く有ものぞ
 親が惡事をせぬゆへぞ
 ますく重恩思ひしれ
 めりひ風をも厭ひしぞ
 親を思はぬおろかさよ
 驚やかすすに劣りたり
 惜むたかすはあは物ぞ
 了の金出して施行せよ
 これに勝れる善事あし
 死で身につく物はあし
 捨て冥途のたびだちぞ

親の惡事が身にむくふ
 一門はん昌することば
 むし又親にはあれあば
 子を慈しむおやぞ、ろ
 子れ程親におもはれて
 おやに不孝あ人くは
 娘むす子をしつけるに
 親の後生のためあはば
 飢死ぬひとを助けあば
 たとひ万貫長じやでも
 つまも子供もせに金も
 冥途の旅立すると死は

耳も聞え老目も見えず
 闇をやみぢに入る事ぞ
 とかく命のあるかぎり
 命はもろ死ものあれば
 今宵頭つうが仕初めて
 強い自慢をするひとも
 けふは他にんを葬禮し
 然れば頼みあは婆に
 富貴さいはいある人は
 貧者に施しせぬひとは
 狗でも口はすぐるぞや
 慈悲善根は了のまゝに

行衛しり老に門をいで
 了の時後悔かぎりあし
 菩提の種をうへたまへ
 つゆの命とあづけたり
 死一生あるもあり
 暮に頓死をするもあり
 明日はわが身の葬禮ぞ
 金銀たくはへ何にする
 貧者に施しせしるべし
 富貴で暮す甲斐もあし
 飢人貧者をたすくべし
 いへ繁るいの御祈禱ぞ

慈悲善根をすゝむとは
 天魔外道はよりつかせ
 能く料簡せしむるべし
 餘りどう慈目にあまる
 くらすこゝろは鬼神か
 子孫繁じやう長かりじ
 施行で借銭しはじめよ
 上たる人をはじめとし
 われもくくと共くは
 貧者のいのち救ふあり
 平生貧者にうやまはれ
 ひとの喰物すつるのを

神やはとけに守りて
 然れば祈禱に成まひか
 恵はとこしありぬとは
 飢死ぬ貧者を見ぬ振に
 慈悲善根のあはれひとは
 實は餘りはあはれものぞ
 夫こそまことの信心よ
 頭だつたるひとくは
 厚く施行に身を入れよ
 廣大無へんの善事あり
 身につく果報有まいか
 好んで捨ふて喰ものは

前世に詩種たりぬもへ
 かゝる有様見あがりも
 鬼にも角にも人として
 この節信心あこりねば

是非あく袖乞する事ぞ
 おのく仁心起りぬか
 信心あければ人であし
 全く牛馬にことあらず

道歌二十首

誰もみあわが身をつみて思ふべし
 あはれみをものにはとこす心より外にはとけのすがたやはある
 地獄とはまゝこの上のつるしものあまり近くて見えぬありけり
 思ふまゝこゝろに罪をつくりせてわれと地獄へつたおとすあり
 慈悲の目にくしと思ふ人ぞあはれつみある身こそ酒あはれあり
 世のあかは市のかりやの絶くはひとりくにかへりこそすれ
 ひと口にのみたる水のつめたさを人のとふともいかゞこたへん

慈鏡和尚
 覺如上人
 道元禪師
 無難禪師
 眞阿上人
 夢想國師
 面山和尚

山どりのほろくどなく聲死けば父かどぞおもひ母かどぞ思ふ
 世のちかは一日外にちかりけり死のふは過ぎつあすはしりれ
 あしくとも善ともいかにいひたてむ折くかはる人のこゝろを
 月かげのいたるぬ里はあけれもあがむる人のこゝろにぞすむ
 おく山のす死のむらち友ぞればおのか身より火を出しける
 あさ夕の飯さへこわし和しかおるふまゝにるるぬ世のちか
 人間にすみしは死に淨土あれさとりて見れば方角もあし
 心ろかりよこしまに降る雨はあらし風に夜のまどはうつらむ
 何事も身のむくひぞとおもはすば人をも世をもうらみはてまし
 ちにごともけふの歡樂すぎぬればかちぞ明日の苦患とある
 ちかしくに身を思はねば身ぞ安し身をおもふに身は苦しけれ
 何れをか我れとはいはひかりにた、地水火風のあはせたる身を
 欲ふか死人のこゝろと降る雪はつめるにつけてみちをわする、

行基菩薩
 傳教大師
 弘法大師
 法然上人
 榮西禪師
 一休和尚
 親鸞聖人
 日蓮上人
 愚中禪師
 雲居國師
 無能和尚
 佛徳禪師
 寂室和尚

山やま登のぼりのほろくとなくとなく聲こゑ死しけば父ちちかどぞおもひ母ははかどぞ思おもふ
 世よのなかは一日いちにち外ほかにいかにあかりけり死しのふは過すぎつあすはしりれを
 あしくとも善よきともいかにいひたてむ折やりくかはる人ひとのこゝろを
 月つきかげのいたりぬ里さとはあけれおもあかむる人ひとのこゝろにぞすむ
 おく山やまのす死しのむらたち友ともせればおのか身みよりう火ひを出いしける
 あさ夕ゆふの飯めしさへこわし和やわらかしおもふまゝにをあらぬ世よのなか
 人間にんげんにすみしほどにを浄土じやうどあれさとりて見みれば方角ほうかくもあし
 心こゝろろかりよこしまに降ふる雨あめはあらし風かぜにを夜よるのまははうつりむ
 何事なにごとも身みのむくひごとおもはすば人ひとをも世よをもうらみはたまし
 さにぞともけふの歡樂くわんらくすぎぬればかありて明日あすの苦患くげんどうある
 あかくに身みを思おもはねば身みぞ安やすし身みをおもふに身みは苦くるしけれ
 何れいづをか我われとはいはひかりにた、地水ちすい火風かふうのあはせたる身みを
 欲よくふか死し人のこゝろと降ふる雪ゆきはつめるにつけてみちをわする、

行基ぎやうき菩薩ぼさつ
 傳教でんぎやう大師だいし
 弘法くわんぽう大師だいし
 法然ほつぜん上人じやうじん
 榮西えいせい禪師ぜんじ
 一休いっけう和尚わうじやう
 親鸞しんらん聖人せいじん
 日蓮にっれん上人じやうじん
 愚中ぐちゆう禪師ぜんじ
 雲居うんこ國師こくじ
 無能むねい和尚わうじやう
 佛德ぶつとく禪師ぜんじ
 寂室じやくしつ和尚わうじやう

明治二十三年一月廿一日 印刷
 明治二十三年一月廿二日 出版

編纂人

奈良縣平民 佐々木 慧雲

京都油小路北小路上ル玉本町 第六番戶寄留

發行兼印刷人

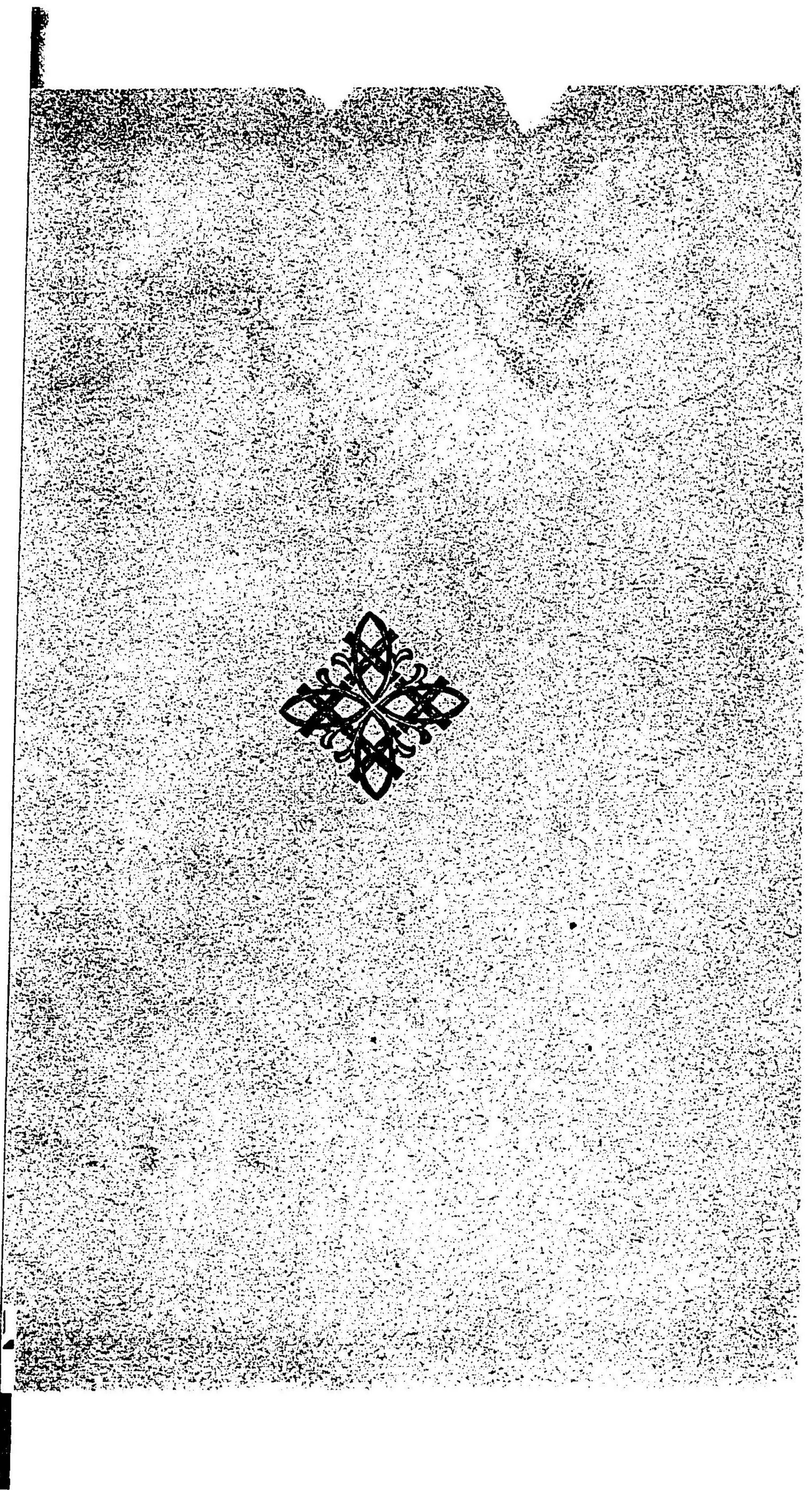
兵庫縣平民 清水 秘藏

京都油小路北小路上ル玉本町 第六番戶寄留

行所

京都油小路北小路上ル玉本町

興教書院



019321-000-2

特16-336

安心ほこりたたき附施行歌。道歌二十首

白隠／著

M23.1

ABG-0007

